

雲南同郷会と『滇話報』

吉川次郎

はじめに

清末に日本を訪れた中国の留学生たちは、各自の出身地にかかわるさまざまな雑誌メディアを刊行したが、なかでも雲南出身留学生たちによって1906年秋に創刊された『雲南』雑誌は、最長の発行期間を誇った。その直接の発行主体は東京の雲南雑誌社であったが、留学生のメディアである以上、雑誌の存在を背後で支えていた留学生組織、雲南同郷会が果たした役割は大きい。雲南雑誌社の幹事であった李根源は雲南同郷会の会長も務め、雑誌社と同郷会の主要なメンバーはほぼ重なっていた。そして、雲南同郷会の成り立ちや内部のさまざまな約束事は、当時の雲南人留学生の動態の一端を示すとともに、『雲南』雑誌において表現されるさまざまな価値意識や行動原則を規定するものでもあった。本稿では、雲南同郷会の基本的な活動とともに、それと深いかわりをもつ1908年創刊の『滇話報』について取り上げる。『滇話報』は、文言（書面体）による『雲南』雑誌を補強すべく後発で刊行された白話（口語文体）の雑誌で、雲南人留学生たちの作り出したもう一つの「遠隔地メディア」の言説を伝えるものである。

I 雲南同郷会の成立

雲南同郷会は1904年8月30日に東京で設立された留学生団体である。雲南同郷会が発行したパンフレット『雲南同郷会第壹次報告』¹はその成立に至る前史を語っている。

「雲南の東京留学生は当初、日本在住の人数がごくわずかであったため、貴州の留学生と合同して『雲貴同郷会』を結成した。光緒三十年〔1904年〕の秋にいたって、両省の人数が増加し、

1 劉昌明（編集主任）『雲南同郷会第壹次報告』日本東京雲南同郷会、光緒三十一年四月一日（雲南省図書館所蔵）。

また会の章程の多くが守られなくなったために、会に参加しようとする者も日ごとに減っていった。同人はその状況を憂慮し、雲貴同郷会を解散して、分立することでそれぞれの団結力の強化を目指そうと協議した。両省の会員多数の賛成を経て、雲南同郷会は七月二十日〔8月30日〕に成立した。牛込区音羽町の錦亭にて茶話会を開き、会規を議決して、会の職員三名を選挙した。午後1時に開会、3時に散会したが、これが本会が完全に成立した記念日である」²

ここで紹介されている同郷会成立のいきさつを踏まえ、さらに若干の補足を加えるならば、会をめぐってはおそらく次の状況がうかがえる。

1. 雲南省と貴州省の結びつきには、たとえば清朝において「雲貴総督」が置かれていたように隣接地であるとの地理的根拠はあったにせよ、雲貴同郷会の結成自体は人数の不足によるやむを得ざる選択であった。

2. 雲南省・貴州省それぞれからの留学生が増加すると、かえって雲貴同郷会の活動自体は低迷した。背景には「省」同士の不一致や対立があったことがうかがえる。

3. 1906年1月に同郷会会長に就任した李根源は、その回想録『雪生年録』のなかで、「日本にいたとき、同人たちは革命の準備においては雲南・広西・四川に重心をおくことを協議して決めていた」³と記している。やがてその構想は滇粵聯郷会の動きに結実することになるが、逆にいえば雲南の主体的な選択において四川・貴州は連携の対象から落ちてしまったということである。雲南と広西にはともにベトナムを通してフランスからの脅威を受けているという共通点もあった。李は辛亥革命後の経過をふまえて、「雲南と広西の同人はあらゆることを成し遂げたが、四川の方は極端な混乱の中にあり提携はうまくいかなかった」⁴と振り返っている。

同郷会組織は、同一の省出身者同士の一体感を高めるとともに、留学生たちによる省名を冠した雑誌メディアの発行に貢献した。そのなかで、省の枠を越えた組織的な連携については、他にも例があった。たとえば、広東・広西両省の同郷会を合同した「両広同郷会」がそれである。

1904年9月に出版された『日本遊学指南（附留学報告）』⁵は、組織のルールを定めた「両広同郷会章程」を載せている。そこには、冒頭に「本会は東西両省〔広東・広西〕の同人組織を合わせて成り立っているため、両広同郷会とする」と記され、会の本旨として「本会は故郷の誼を厚くして、実学を研究し、互いに励ましあつて、両省の文明を開発することを宗旨とする」ことが掲げられている。

ここで両省の連合が可能であった理由は、「故郷」を同じくすると認識されていたからであり、

2 「同郷会記事」同上、1頁。

3 李根源『雪生年録』文海出版社、巻一、十七裏（35頁）。

4 同上。

5 両広同郷会編輯『日本遊学指南（附留学報告）』、1904年9月。

より踏み込んでいえば、広東語を共通言語とする「粵」の文化的なつながりがあったからであろう。同書に収められた「兩粵の人々が日本に留学することを勧める文」⁶が振り返る「兩粵」留学生の動向は、出身留学生が少ないという点では雲南と共通するものの、そのおかれた状況は相当異なるものであった。

「〔日本が中国の学生の間でいわば「新たな殖民地」となった〕この五年来、官費・私費の身分で留学へとむらがった人間は三千人にも上っている。とりわけ、湘〔湖南〕や鄂〔湖北〕や呉〔江蘇〕や越〔浙江〕や川〔四川〕の省籍を持つものはそれぞれ数百人というのに、ひとり我が兩粵〔広東・広西〕だけは寥寥として百にも満たないのだ。だいたい今日の中国各地にあって、気風がもっとも先進的なのは粵以外にない。財力がもっとも豊かなのは粵を措いてない。交通がもっとも便利なのは粵の他にない。ところが、留学生界隈ではまったく存在感がないありさまだ。こんなようでは、我が粵の個人としても郷土に対する責任を果たせないし、我が粵全体としても国家に対する責任を果たすことができない」⁷（下線部は筆者による）

先進的で恵まれた広東の人間が、なぜ広西と手を携えて日本への留学に赴かなければならないのか、その理由の一つとして「我が兩粵はイギリス・フランス二強国の激烈な競争に直面しており、いたるところで騒乱の気配につけ込もうとする動きがみられるのはきわめて危うい」と明示されているように、ここでも外からの脅威が二つの「粵」を結びつけているのがよくわかる。

一方、雲南がとりわけ広西との連携をもとめて「滇粵聯郷会」の結成に動くのは後の話として、貴州と分離して純化路線を進めた1904年の雲南同郷会をとりまく状況は、どのようなものだったのか。再び『雲南同郷会第壹次報告』に立ち戻り、少し長くなるが「序文」を繙いてみたい。

「〔いま内地の省では欧米に赴く者も少なくないが〕日本留学についていえば、約四千名である。ところが、我が滇〔雲南〕は百五十人である。気風は各省に比べて遅れているが、〔周囲の〕レベルが高いとはいうまい、愛国心を奮い起こすのみである。〔留学してくる〕行程は各省に比べて遠いが、道のりが厳しいとはいうまい、愛国心を奮い起こすのみである。そして、愛国心を奮い起こせば、その次はもちろん学問である。教育にしても、政治にしても、実業にしても、軍事にしても、その一つでも身につけなければ『滇』は成り立たず、その一つでも学ばなければ『土』たりえない。百五十人が分担して諸学を統合するのだ。心をつ一つにして、東邦〔日本〕で学び、南国〔雲南〕に広めていく。国情を考慮して国粹に役立つようにしたならば、それからは滇のすべ

6 「勸兩粵人游学日本啓」同上、1頁。

7 同上。

ての人々が一つ一つ学んでいく。これが国民を鑄造するということで、国民が出来上がれば滇は安泰である。同郷会は今年の夏に始まったが、続々と集まって日ごとに盛んになり、尽きることのない状態である。光緒壬寅〔1902年〕には十人に満たなかった。つづく癸卯〔1903年〕も人数はほぼ同じ、それから二年で十倍にまで増えた。ああ、これが我が滇の留学が初めて盛んになった時代である」⁸

同じく留学生の少なさに悩んでいるといっても、上記引用からは雲南の学生たちが両広同郷会の場合とは全く異なる状況にあったことが浮かび上がる。知識・情報の面で後れを取っていることへの危機感、「辺省」にあることの地理的困難、これらを乗り越えるよすがとして想起されるのは「愛国心」であり、また、国民創成に向けて一人一人に役割を割り振ろうとするメンタリティであった。

ところで、この「序文」は、さらに雲南同郷会が「自治」を訓練する組織であることも強調している。『雲南』雑誌では、雲南が「辺遠」に位置し中央政府の統制が十分に及ばないために逆にさまざまな「自治」の政策を実行できる、という言説が語られていたが、留学生たちはそのことを日本での実践においても証明しようとしていた。雲南同郷会が単なる新人留学生の受け入れ機関⁹や留学互助会ではなかったことの意味を次節でみていきたい。

II 民主主義の訓練の場としての雲南同郷会

雲南同郷会は「雲南同郷会章程」の第十二章で「自治」について定めており、その第三項には次のように記されていた。

「三 およそ会員は、品行が正しくあるべきである。国体を毀損し、出身省の名誉を傷つけたと公衆が認めた者については、同人たちは左の三つの方法によってそれぞれ対処しなければならない。

- 一、書簡による譴責 公簡により詰問・譴責・激励を行う。
- 二、公開譴責 開会時に議場で正式に叱責する。
- 三、強制帰国〔これは自費・公費ともに帰国させられる旨を国内の保護者等に伝えることで、同郷会としての処分ではない〕¹⁰

8 「序文」『雲南同郷会第壹次報告』前掲、1-2頁。

9 もちろん、他の同郷会と同様に、新しく来た留学生や遊歴人員の受け入れ機能も備えていた。来日時に横浜上陸の場合は横浜まで、神戸上陸の場合には新橋まで同郷会から迎えに赴いた。

本来、雲南出身留学生同士の団結をはかる組織だけに、団結をそこなう結果をもたらす処分に關しては、かなり慎重であることがみてとれる。一方で、「自治」を実践的に経験するためのきまりとして、同郷会は開会時の規則を10か条にわたって事細かに決めていた。

「開会規則十条」¹¹

- 一、会場の選定は一週間前に書記が同人に伝える。
- 二、開会時間は午前九時から十二時までとし、演説二時間・茶話一時間に区切る。もし議題に乗せる案件があれば、演説を後にしてもかまわない。
- 三、会員は用事がある場合にはあらかじめ書記に報告しなければならず、勝手に欠席することはできない。遅刻者はその理由を明らかにすること、早退も同様である。
- 四、定刻になって幹事が開会を宣告すると、会員一同は並んで座り静聴する。演説会が終われば、再び幹事が散会を宣告する。
- 五、演説・特別講義・一般討論のいずれにおいても、できるだけ学生同人の士気をたかめ、社会知識を増強することを主とすべきである。
- 六、演説は「リレー演説」と「自由演説」の二種類に分かれる。「リレー演説」とは毎回の開会時に三名に限定してあらかじめ書記から発表しておき、それを順次行うというもので、他人に委ねることはできない。「自由演説」とは、その余った時間に誰かにやらせるものである。
- 七、演説および議事を行うときは、前後の順序を守らなければならず、勝手に順を乱したり、大声で言い争ったりしてはならない。会規を厳粛に守り、耳目を集められるようにすること。
- 八、演説および議事を行うときは、反対者や意見が異なる者はつとめて論理的に反駁し、冷静に話し合うべきである。少しでも感情に任せたり、思うままに嘲笑したりしてはならない。また、一人が話し終えるのを待って、起立して意見を述べること。
- 九、演説および議論した案件については、書記がその場で筆記をとり、検証に備えるようにすること。
- 十、以上の九条について違反したものは、本会規則第十二章第三条の「公開譴責」法により処分される。

このような生真面目な厳密さは何のために用意されていたのかといえ、まさに実践的な「自治」の訓練のためであった。時間の厳守や演説時のマナーといった規範的なもののほか、たとえば「五」のように、一見、教育的な努力目標に見えながら演説内容にまで踏み込むものもある。

10 「雲南同郷会章程」『雲南同郷会第壹次報告』前掲、4頁。

11 「開会規則十條」『雲南同郷会第壹次報告』同上、4-5頁。

また、「六」の「リレー演説」は、おそらく発言の機会均等を保証するねらいがある一方で、書記の指名により拒否ができないという点からみれば、演説が不得手な学生は苦慮したはずである(後述)。ともあれ、「自治」の訓練という以上に、とくに演説を重視するあり方から、会はいわば言論による民主主義を練習する場であったといえよう¹²。もちろん、「演説」が明治期日本で隆盛を誇った文化の一形態であったという背景も見逃せない¹³。参加者は、細かな取り決めによって規範化されたふるまいを通じて「国民」としての身体性を獲得し、また演説者は語り口の様式美に沿うかたちで、近代的価値意識の内面化を図っていくことになる。

以下、ひとまず記録に残っている同郷会成立から第九次例会までの会合をリスト化しておきたい¹⁴。

	開会日	開会時間	場所	備考
雲南同郷会成立	光緒三十年 七月二十日 (1904年8月 30日)	午後1～ 3時	牛込区音羽町錦亭	茶話会、会規を議決、職員三名を選挙
第一次例会	光緒三十年 八月初二日 (1904年9月 11日)	午前8～ 11時	牛込区赤城元町 江戸川亭	
第二次例会 兼歓迎会	光緒三十年 九月十六日 (1904年10月 24日)	12時 散会	牛込区矢来町 三番地矢来倶楽部	
第三次例会 兼秋季懇親会	西暦 11月20日	午前9～ 午後1時	上野精養軒	改選投票により庶務幹事に張耀曾、書記幹事に羅佩金、会計幹事に李燮元を選出、寛永寺の傍で撮影(全員男子学生)
第四次例会 兼歓迎会	西暦 12月11日	午後1時 散会	神田区錦町錦輝館	
第五次例会 兼歓迎会	西暦 1月8日	12時 散会	神田区錦町錦輝館	

12 坂元ひろ子『中国近代の思想文化史』(岩波書店、2016年)では、辛亥革命前の『画報』メディアにおける女性の描き方が「進化」のイメージ装置と化していたことをとらえて、それを「近代化の練習」、あるいは「革命練習」と記している(同書83-84頁)が、同郷会での演説もまたそうした「練習」の一つであった。雲南同郷会で何人もの女性が演説し、その内容がそのまま白話雑誌『演話報』に収録されていることについては、後述。

13 さねとうけいしゅうが紹介する啓智学社著訳『留学生鑑』(啓智社、1906年)は全28章からなる日本留学の案内書だが、そのなかには「読書法」や「記憶術」などと並んで「演説法」という章もあり、「その内容は日本の学生のための東京遊学案内と大差がない」と指摘している(さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書房、1981年、107頁)。

14 「同郷会記事」前掲、1-5頁。

第六次例会 兼新年懇親会	西暦 2月5日	午後1時 散会	上野精養軒	参加者125名、幹事の張耀曾が初めに開会のことばを述べ、留学生会館が出版した留学生実記について書簡で問い合わせるとともに、雲南で学生を選抜して安南（ベトナム）へ派遣する動きがあることを書簡により阻止する件を提案、改選投票により、庶務幹事に劉昌明・李伯庚、書記幹事に楊振鴻・何国鈞、会計幹事に陳詒恭・袁丕鏞を選出する
第七次例会	西暦 3月12日	午後1時 散会	上野桜館	60歳過ぎの留学生周霞の帰国決定、他の学生と写真撮影
第八次例会	西暦 4月9日	午後1時 散会	麴町区飯田川岸 富士見楼	主に新学と旧学について「リレー演説」
第九次例会 兼歓迎会	西暦 5月7日	午後1時 散会	麴町区飯田川岸 富士見楼	改選投票により、席聘臣・趙伸が庶務幹事となる

Ⅲ 雲南出身留学生にとっての日本

雲南同郷会のパンフレット『雲南同郷会第壹次報告』に付録として収められた「雲南の知識人に日本への留学を勧める公開書簡」という一文がある。これは文字通り雲南の人々に日本への留学を促すために書かれたものだが、そこでは雲南の自画像を次のように描いている。

「そもそも雲南は辺境ではあるけれども、東は貴州・広東・広西と分かたれ、西はチベット・ミャンマーに接し、南はタイにあたり、北は四川に連なっている。八十四万百七十平方里の版図を有し、その外側の国境地帯はさらに千余里を数える。長さは日本に及ばないが、広がりでは上回っている。住民は千万人以上、勇敢で敢闘精神に富み、質朴かつ勤勉で、大和民族にも劣らない」¹⁵

自身の辺境性を認めた上で、実は雲南が中国南方の諸省と密接につながっているばかりか、国際的にも枢要な位置にあることが謳われ、さらに雲南一省と日本全体との比較がなされているのが特徴であるといえる。興味深いのは、この続きの部分で雲南の各地方を日本の具体的な地名と一つ一つ照らし合わせて念入りに比較している点である。そこでは、金沙江・瀾滄江・富良江・黒瀨江の流れが利根川・江戸川・信濃川・木曾川に、麗江・普洱の銅が秋田・岡山に、昭通・永平の鉄が岩手・島根に、臨安・他郎の金が薩摩・佐渡に、白羊・玉絲の銀が秋田・福島に、臨安・昭通・雲南県などの豊富な石炭や鉱物資源が福岡・長崎・北海道に、石膏・喬后・黒・白・琅の塩

15 「勸滇南人士遊学日本公啓」『雲南同郷会第壹次報告』前掲、1頁（付録部分）。

井が瀬戸内海の十州塩田に、それぞれ擬えられている¹⁶。ただ、こうした日本の各地域に対するまなざしが、平板な日本像の分節化や地域の多様性の発見につながったかといえ、これもやはりトータルな日本に収斂する道具立てであったとみられる。

周縁だがそこは中心でもある、という構図は、近代西洋との関係における当時の日本の姿そのものであった。その日本も当然、内部にさまざまな地域（場合によっては辺境）を抱えているわけだが、それらの地域がすべて個別に日本全体の産業発展を支えている、と留学生の目には映じていた。そうした地域ならば雲南にもあり、各地の産業振興に成功すれば、つまり雲南はそのまま日本たりうる、という文脈での地域へのまなざしだった。

ただ、ここで雲南と日本を相似形で描いているとはいえ、それが文字通り雲南の国家的独立を意味しないことは、確認しておく必要がある。雲南の自然環境とマン・パワーを最大限活用することによって、文中のこぼれを借りれば「勢力を拡張して、中原を守り、異族と上下を争って優勝の地位を占める」というように、あくまで「中国」の全体性へと回収されるものであった。雲南出身留学生たちは、日本で他省の留学生たちと触れ合うなかで、自らが中国のなかで置かれた地位、「中心」と「周縁」への意識を強く持った。したがって、雲南を日本の一地域に比定することに満足せず、あくまでもナショナルなスケールの日本と同一視することによって、雲南の地域ナショナリズムを喚起する手法がとられたのである。

日本への留学を勧めるこの文章は、英・仏両国により圧迫を受けている雲南の現状に対して、留学を通じた学術の発達によってこそ打開が可能であると説いている。「滇南大州〔雲南〕を二十世紀に雄飛させるのは、まさに留学生の天職である」¹⁷との文言は、いかにも大仰で力んだものに見えるが、しかし、20世紀初頭の日本、日露の激戦が進行する同時代の空気は、留学生にそのような感慨を抱かせたとしても不思議ではなかった。次節では、雲南出身学生による白話雑誌『滇話』のなかから、同郷会の学生たちによるさまざまな日本への言及についてもみていくが、その日本イメージには日露戦争が色濃く影を落としており、さらに細部の屈折をともなう雲南の社会像やベトナム認識にも影響を与えていた。

IV 白話雑誌『滇話報』の言説：女子の声と日本・ベトナム

『滇話報』は1908年1月に東京で創刊された。日本で雲南出身留学生が主体になって発行した白話雑誌であり、「教育の普及・言語の統一・女子教育の提唱・社会の改良」を宗旨としていることから、『雲南』雑誌以上に啓蒙的色彩の濃いメディアであったといえる。劉鍾華が編集者とな

16 文章はさらに、劍川・雲龍の樟腦、保山・騰越の木綿、普洱の茶、太和の石を雲南の特産として列挙している（同上、1-2頁）。

17 「勸滇南人士遊学日本公啓」同上、3頁。

り（代表は李長春）、創刊当初は神田区西紅梅町六番地に事務所を置いたが、ここは『雲南』雑誌が1907年8月の8号から1908年11月の15号まで編集所を置いていた。『滇話報』は月1回の発行を目指したが定期的な刊行はできなかった模様で、5号までが確認されている。留学生の雑誌出版ブームのなかから生まれたメディアであったが、とくに、第5号の広告欄に『雲南雑誌』・『粵西雑誌』・『新女界』・『四川雑誌』・『農桑雑誌』を並べて掲載していることから、発行に携わった人々をとりまく地域同士のつながりや共通意識がうかがえる。雑誌の拡散の仕方についてみると、雲南省城（昆明）をはじめとする雲南省内各地のほか、北京やミャンマーのマングレー、貴州省城（貴陽）に『滇話報』自身の支社および代派所をもち、さらに国内のうち四川省と広西省においては、それぞれ『四川雑誌』・『粵西雑誌』の支社や代派所を利用していた。また、それ以外の各省では、上記の『中国新女界雑誌』・『農桑雑誌』のネットワークを相互に活用した。東京発の『滇話報』は、遠隔地メディアの特性を発揮して読者にも相当な地域的広がりをもっていたといえよう。

先行するメディアとしてすでに『雲南』雑誌があり、しかもそれが一定の成功を収めていたなかで、新たに月刊誌を立ち上げる意義について、「発刊詞」は次のように述べている。

「我ら雲南から日本へ留学している同人はすでに『雲南雑誌』を組織して文明を輸入し、国民精神を鼓舞してきた。さらに、一般の人民については、教育がまだ深まっておらず、学識も浅くて理解しきれていないことを考慮して、『滇話報』もつくることになった。〔中略〕その主義は、教育を普及させて民智が大きく開かれるようにうながし、社会を改良して民徳が日々新たになることを願い、言語を統一して民心団結の基礎を立て、女子教育を提唱して国家文明の母をつくるものである。その言論は、純粹に全国通行の漢話体で表現される。〔中略〕我が全国の同胞がどの家庭にも一冊を置き、誰もが一編を手にとってくれるように願っている。その主義を理解し、その言論を目にすることによって、思想を構築し、具体的な事象に対して行動を起こすようになってほしい」¹⁸。

ここでは『雲南』雑誌よりもさらに幅広い読者層に呼びかけるという目標が明白に掲げられている。また、四つの主義のなかに「女子教育の提唱」が含まれていることは、『雲南』雑誌の「男女平等思想」が九大宗旨の最後の一つであった点を考え合わせれば、女性への注目度が相対的に高まっていることがわかる。もっとも、その「女性」は、この時代のトーンとして国民の「母」たる役割を果たすことを強く求められていた。

『滇話報』を全国のすべての家庭に置きたいという表白はご愛敬としても、啓蒙の対象を単に

18 「発刊詞」『滇話報』第1号、1908年1月、2-3頁。

雲南だけにとどめず、さらに雲南の抱える問題を起爆剤として中国全体の言論の世界へ積極的に打って出ることを意識している。その自信は、「全国通行の漢話体」という、当時の白話雑誌によって作られつつあった言語インフラに裏打ちされていた。

ここからは、雲南の個性から中国の一体性へと訴えかける『演話報』において特徴的な言説として、相互に絡み合う「女子」・「日本」・「ベトナム」という3つの角度から検討してみたい。

(1) 女子の声と演説

『演話報』にはいくつもの白話小説が掲載されているが、第2号に掲載された「風琴夢」という小説は、前書きによれば湘江平湖県自強村の呉瑚女士（字は理平、璞卿と号した）を主人公とする物語である。その第一回では、鐘師母と呼ばれる知識人女性が登場する。鐘師母はことに新しい知識や理論を愛し、普段からサロンのような場を設けているが、役所から賢婦人の表彰に応じるよう説得にやってきた韓先甲・李旋元の二人に対し、当日にあったできごとを語る。左麟書という少女をつれて普照寺へ参詣したところ、少女の兄の左秉忠といとこの劉起漢が古典について論争しているところに出くわした。鐘師母は「班〔固〕・〔司〕馬〔遷〕・欧〔陽脩〕・蘇〔軾〕」の価値は認めるけれども、いま「救亡」の時代にあって求められているのは、実用的でわかりやすい文字であるという。四、五年で新聞や書物を読めるようになる欧米、四、五年で新聞が読めるようになる日本の文字と比較して、中国は文字があまりに優れていたためにかえって難解で、「国家の進歩を阻害し、国民の思想を閉ざしてしまっている」というのが彼女の主張であった。

「各国文明の進歩はすべて中下等の人間が新知識をもち、改革の原動力となっています。〔難解な文体に価値をおく〕中国ではどれほど困難なことでしょうか。これら中下等の人に新思想や新理論を普及させるには、簡単な文字によって次から次へと流し込むしかないのですから」¹⁹。

さらに、鐘師母はいまや簡単な文字を使うだけではなまぬるく、知識を普及させることができないので、「演説会」を開き、「通俗報」をつくるべきだと主張する。その演説調の長い語りは、そのまま『演話報』創刊の動機を代弁するものにもなっている。

それだけではない。普照寺に連れ立っていった少女左麟書は「毅然としてさっぱりした性格」である一方、鐘師母に説き伏せられて悔悟の涙まで流す左秉忠と劉起漢、表彰という役所の陳腐な用向きを伝えたところ、厳しく叱責されて無言のうちに帰る韓先甲・李旋元など、小説の冒頭で仮託されているのは、新時代の要請に目覚めた女性が「情けない」男性たちをやり込める対照

19 望雲「風琴夢」『演話』第2号、1908年5月、39頁。

的な図式であった²⁰。

『滇話報』における女性に関するマニフェスト的な論説は、第1号に掲載された詹詹「女子教育の必要性について」²¹である。論説の趣旨は、端的に「男子と同じ平等な女子教育を求める」という点につきののだが、その文面には色濃い時代の刻印とともに雲南から見た状況認識がよく表れている。

文章は、女子教育こそが西洋各国の富強の理由であることを述べた後で、日本について次のように言及している。

「たとえば最近の日露戦争では、日本の女子はみな衣食の儉約につとめ、お金を持ち出して軍備のために募金し、娼妓でさえもかんざしや衣服を質屋に売り払って軍に貢献したものです」²²

前節では、雲南の留学生たちが日露戦争のただなかにあったことに触れたが、戦後にも戦争中のさまざまな物語が、むしろ伝説化することによってより強いインパクトを帯びつつ流布した。ここでの「娼妓の戦争協力」というエピソード²³もその一つであろう。

しかし、論説の筆者が読者の女性に求めるものは、むしろ「妻」や「母」としての国家への貢献であった。日本では妻や母たちが「愛国の熱力」で夫や息子を鼓舞したために、「こんなちっぽけな島国である小日本が、ついにかの堂々たる大ロシアに勝利することができた」というわけである。

20 この小説が「文」について描いているとすれば、すぐ後にロシア・プロシア・オーストリアによるポーランド分割を背景とする戯曲「姉妹投軍」（磨厲作）が掲載されているのは、「武」の側面からの女性像を示すものであろう。

21 詹詹「論女学之必要」『滇話報』第1号、前掲。

22 同上、12頁。

23 なお、「娼妓の戦争協力」は男性の書き手たちの間でたく興味をそそる話題であったとみえる。たとえば、1908年7月11日付『読売新聞』のコラム欄「編輯室より」には次のような記述がみられる。

安南革命党員の檄文中には、「安南の婦人等よ、日露戦争に日本の勝利を得たるは、幾多の可憐なる日本婦人が、愛国の一念に駆られて露国士官の妻妾となり、彼等を迷はして有力なる地図軍略上の記録等を盗み出したるに依れり。安南の婦人も、須らく斯の大決心を以て革命軍に従事すべし」との婦人の海外出稼ぎを扇動する文句有之候。日本婦人も飛んだ所へ引合に出されたものに候〔文章の区切りは引用者による〕。

きわめて軽薄な調子で引用される「安南革命党員の檄文」とは、実は『雲南』雑誌に掲載されたファン・ボイ・チャウ「海外血書」の一節である。なお、「海外血書」は汪康年によって『京報』で批評されたこともあり、後には桂林の『南報』にも転載されている。戦争を媒介とする男性目線の女性観が東京に集う東アジアの男性たち（ベトナム・日本・中国）のあいだで連鎖的に共有され、さらにベトナム本国や中国各地にも拡散していく様子が見て取れる。

日本のイメージや戦争の影響を色濃く含みつつ、筆者のまなごしは中国国内の女子教育の状況に注がれる。筆者は南北各省における女子教育によく萌芽がみられることに言及したうえで、雲南の現状を次のように記す。

「しかし、私たち雲南は西南の片隅にへだたり、情報も中原と通じていません。しかも二方面の辺境をイギリス・フランスに圧迫され、まさしく虎と狼のかたわらに眠る病人のようなもので、それは危険で恐ろしい状況なのです。〔中略〕私たちのふるさとの人間は、〔中略〕男子教育が大事だと知っている者さえ少ないのに、こうした女子教育についてははっきりいって誰も問いかねようとしません」²⁴

他省と同様の男性優位の教育格差に加えて、「辺省」であるがゆえの苦境という二重の壁が立ちだかるなか、筆者は男性に向けてではなく、故郷の全女性に女子教育の振興を直接呼びかけて、いったん文を閉じている。そこには、女性が「自ら学びを求めつつ、同時に他の人々にも学びを勧めるよう訴える」ことによってしか、雲南をとりまく危機の克服はできないという筆者の信念がみなぎっている。

この論説は、女子教育の必要性を訴えることに主眼が置かれているが、それに付随するかたちで軍国主義の観点、そこから理想化された日本、辺境にあることの意味といったさまざまな要素が顔を出している。『雲南』雑誌と同じように、これらの要素は各々が独立せず、互いの論理を支えあうことによって、いわば『滇話報』の主張の全体像というべきものを織りなしている。

ところで、『滇話報』は白話雑誌であるとともに、宗旨で「女子教育の提唱」を標榜していたことから、女性によってなされた演説をそのまま文字に起こしたものを比較的多く採録していた。その演説とは、Ⅱ節で述べた雲南同郷会における「リレー演説」であり、雲南の女子留学生たちの声をかなり近くから伝えてくれている。

現存する『滇話報』のうち、第1号には「雲南同郷会第三十八次例会兼歓迎会張佩芬女士演説」が掲載されている。また、第2号には、「雲南同郷会第四十一次例会兼歓迎会李巽如女士演説」と「同会李毅如女士演説」が社員の手で書き残されている。これら3つの演説はいずれも自身が留学に来た目的を語るものだが、形式面でまず目を引くのは、演説者に常用される言い回し、その過剰なまでの謙遜ぶりである。

「私はもともと知識のない人間で、じつに恥ずかしく思っています」

24 詹詹「論女学之必要」前掲、12-13頁。

「私のように愚鈍な者でも、みなさまのおかげで留学に来ることができました」

「私はそもそもそれほど教育を受けたことがありません。知識もとても浅く、いくらか新聞を読んでいたに過ぎません」

「私はもともと演説が苦手なで、今日はあれこれ変なことをいったかもしれませんが、合っているかどうかわかりません、ぜひご教示下さい」²⁵

「私にはもともと基礎が欠けているし、資質も鈍いので、学業が成就するかどうかは正直わかりません」²⁶

「私は無才無学で、留学の資格などひとつとしてありませんでした」²⁷

もちろん、演説において単なるレトリックとしての謙遜のことばは十分ありうる。また、上述の通り、「リレー演説」は指名された場合に拒否できないルールであったため、実際に自信のなさの表れであったのかもしれない。だが、それほど長くはない演説文のなかで繰り返し語られる謙遜と自己否定のことばは、一種、女子の語りのスタイルといえるものになっていた印象を与える。留学生全体の中で女子留学生の占める割合が極めて低かったこと（『雲南雑誌』第1号掲載の集合写真「雲南雑誌発刊記念撮影」からは、圧倒的多数が男子学生であったことがわかる）は、ことばの選択にも確実にバイアスをかけていたはずである。一方で、いずれの演説も自己への否定的な言及を雲南あるいは中国の女子をとり巻く惨状と結びつけ、そこからの脱却をはかるという構成になっているため、自らの主張を効果的にするための戦略的な面もあったことがうかがえる。遠い辺境からやってきたという意識が雲南同郷会の場の前提としてあり、女子のそうした姿勢は辺省のマイナス・イメージを土台に自分の主張を組み立てるという『雲南』雑誌にみられた戦略ともシンクロするものであった

それでは、以下に3つの演説の特徴を具体的にみていきたい。

①張佩芬女士演説：「生利・分利説」への言及と雲南の現状

張佩芬女士の演説では、中国の女性には「自立能力が全くなく、国家における『分利』の民となっており、さらに国家に対する国民の義務については誰一人知らない」と厳しく批判している。これは梁啓超の『新民説』における「生利と分利について」に由来するもので、当時、ベトナム

25 以上は、「雲南同郷会第三十八次例会兼歓迎会張佩芬女士演説」『演話報』第1号、前掲。

26 「雲南同郷会第四十一次例会兼歓迎会李巽如女士演説」『演話報』第2号、前掲。

27 「同会李毅如女士演説」、同上。

本国で活動していた知識人グエン・ヴァン・ヴィンも「生利・分利説」に言及していた²⁸ことを想起すれば、あらためて梁啓超の『新民説』がもたらした広範な影響を読み取ることができる。張女士は家庭を国家の基礎ととらえ、家庭と社会への影響を考えれば、女子の知識・道徳の修養がきわめて重要であるとする。「一つ一つの良好な家庭から、英雄愛国の人間をつくりだして、国家に用立てる」ことで、最終的には「雲南が他民族によって滅ぼされるようなことがなくなり、雲南を強くすることで中国を強くする」のが、その理想であった²⁹。

そうした理想から観察される雲南の教育の現状とは次のようなものだった。

「残念なことに内地では先生も学友もきわめて少なく、『新書』にしても多くを見ることができず、したがって何一つ得られませんでした。いま、みなさまの多大な力をもらって、東〔日本〕へ留学にすることができました。先生・学友は多く、学校も内地にくらべていいです。今後も初志を抱きながら、勉学に専念して教育の道に役立ちたいです。少しでも得られるものがあれば、雲南に戻って同郷の諸姉妹とともに切磋琢磨します」³⁰

②李巽如女士演説：『雲南』雑誌と国民の創成

李巽如女士の演説では、先行する『雲南』雑誌への言及がある。

「雲南人が将来フランスの奴隷になるのは免れないだろうということを、世界万国はみな知っていたが、ただ雲南人だけは少しも知らなかった。『雲南』雑誌がでてからというもの、雲南人もようやく夢から目覚め、フランス人の恐ろしさを知り、フランス人の方でも深く注目するようになって、ついには自ら『雲南』雑誌をフランス語に翻訳するに至った。〔中略〕巽如はかつて『雲南』雑誌を読み、みなさんの論説を目にした。雲南は面積十四万平方英里、人口は千二百万以上、これでフランス人に対抗すれば、余裕で大丈夫だ、と。」³¹

『雲南』雑誌への高い評価とともに述べられるのは、しかしながら、その雲南千二百万人のうち、実際に役立つのはどれくらいか、というシビアな問いかけであった。李巽如女士によれば、自分たち留学生はまったく問題ないとしつつ、国内にいる男たちはおぼつかない状態であり、女性たちについては、「動物と同じようなもので、酔生夢死のまま、一人として計算できるのはいな

28 新南子「敬告同事者」『登鼓叢報』、1907年6月27日。

29 こうした国家主義的な女性像は『中国新女界雑誌』の掲げる理想と親和性をもつ。『中国新女界雑誌』のスタンスについては、夏曉虹「清末の女性メディアにおける国家民族ディスコースと女性意識——一九〇七年の多元的展開——」『中国—社会と文化—』第29号、2014年7月、26-31頁を参照。

30 「雲南同郷会第三十八次例会兼歓迎会張佩芬女士演説」前掲、44-45頁。

31 「雲南同郷会第四十一次例会兼歓迎会李巽如女士演説」前掲、47-48頁。

い」と辛辣に語る。化粧や料理、つまらない小説を読む、詩句をひねっては悦に入る、と列挙しながら、纏足に対しては怒りよりもむしろあきれた様子を示している。

李女士は自分たち女子も同じく国民であり、国民としての責任をはたすためにも、その能力を身に着けるべきだとする。その一方で、全省の女子が国民としての責任を果たせるようになれば、「みなさんの助手になれる」という具合に、女子の役割に自らジェンダーによる限定を設けているのは、先に触れた男女比バイアスの反映にほかならない。

③李毅如女士演説：暗黒の雲南像

李毅如女士の演説で明確に指弾されているのは、雲南における教育環境の不備である。

「留学の資格などないのになぜ留学に来たのか」という自問に対して、「中国には学ぶ場所がないから」と答え、以下、中国の教育環境に対する酷評がつづく。そのことばは激越で、中国の学堂は奴隷の製造をしている、国民の養成にはまったく不十分で、ただ抑圧的な手段のみをとり、野蛮の極みである。地獄といってもよく、とても学校とは呼べない。男子の学堂ですらそうなのだから、女子の学堂はいうまでもない、ととどまるところを知らない。そのうえで、「我が雲南はいまだ暗黒時代にあり、女子教育の萌芽すらない」と批判している。李女士は演説の末尾で改めて留学に来た目的を語る。

「毅如に〔留学の〕資格があるかどうかはともかく、まずは自分から日本へ留学に来ました。いま学びたいのは教育で、将来帰国して、知識のない女の同胞たちに危機意識をもたせ、みんなが国民としての責任のなんたるかを分かるようにしたいです」³²

「暗黒の雲南像」が描かれるとき、当然、その反作用として日本への礼賛が語られることになる。『滇話報』にしばしばみられる日本への手放しの賞賛は、このようなコントラストからも読み解いておく必要がある。とりわけ女子の声のなかで口々に理想化された日本が語られるのは、当時の国内の女子教育における「暗黒」が、男子以上により暗く意識されていたからであろう。

(2) 遠隔地と「辺省」：理想化された日本像

日本で発行された『滇話報』は、遠隔地メディアであるがゆえに、故郷の雲南に向けてしばしば抽象度の高い知識・情報を発信した。とりわけ、振り返られる雲南について、書き手たちのあいだに遠く離れた「辺省」という自覚があっただけに、日本と雲南をめぐって比較の観点が強く意識され、さらに白話による自由な言及が両者の違いをいっそう増幅した。

32 「同会李毅如女士演説」同上、50頁。

たとえば、『演話報』第2号に掲載された「公德談」³³は、テーマとして「公德」という清末の知識人のあいだで注目を集めた新しい内容を設定したため、両者のコントラストはさらに明白となった。

著者の滇南成仁女士は、「公德とは、〔中略〕少しでも新しい学問をかじっている人ならだれでも語ることができるもの」だが、自分の語る「公德」は他の人とは違うと主張する。他人の「公德」は「学理」や「奥深いところ」からきているのに対し、自分の「公德」は「実践」と「身近なところ」からきているというわけである。このような語り口は、演説というスタイル、さらには口語の強みを十分意識したものだといえよう。

滇南成仁女士の意識する「公德」はきわめて序列化されている。それは「私たち中国人の人を愛する観念は薄弱だといつも感じるし、雲南人はなおいっそう薄弱だ」というもので、さらには「私たち雲南人は本当に利己主義が極点にまで達している」との自己譴責のことばさえみえる。

実践と身近さを打ち出しているだけに、著者は自身の経験談を示している。かつて昆明にいた頃、ある田舎の人が友達を訪ねてきた際に店で道をきいたところ、教えてもらえなかったばかりかかえってだまされ、店の人間も実は意図してだましたのだという。著者は、似たようなエピソードはいくらでもあり、「雲南人には公德心がない」と結論づけている。「雲南人は親戚や友達とは愛し合い、助け合っているではないか」という反論に対しては、それは「公德」ではなく、その親戚・友達に対しても実は表面的なつきあいに過ぎない、とする。また、「雲南人には善行を好み、貧民の救済に取り組む人も多い。とくに仏教者が熱心だ」との指摘に対しても、「公德とはなんらかの利得や目的のために行うものではないはず」と否定する。筆者のここまで厳しい姿勢が何に由来するのかといえば、一つには「公德」が新事物であるだけに、厳密な定義が求められるという学生らしい意識が作用していると考えられるが、もう一つは、自身の経験する日本の存在があった。実際に、「公德」とは何かという例として挙げる日本の姿には絶賛に近いものがある。筆者のなかでは、電車・汽車内での様子、公園・ビル・樹木・電灯・道路・治安のすべてに「公德」が宿っているのだった。

比較参照の対象としての日本の位置づけは、わざわざ昆明での出来事と内容を合わせた次のような語りからも明らかである。

「私が初めて日本に来たとき、道順がわからず、通りがかりの人に尋ねたら、かれらはみんな親切に教えてくれ、私がことばが通じないのを見てとると、字を書き、図を描いて、示してくれた。

33 滇南成仁女士「公德談」『演話報』第2号、前掲。この論説も、内容からみて雲南同郷会での女性会員による演説と推測されるが確定できていない。なお、清末期には女性を装った男性執筆者が多く存在し、夏曉虹は資料の引用に際して注意を喚起している（夏曉虹『纏足をほどいた女たち』（藤井省三監修、清水賢一郎・星野幸代訳）朝日新聞社、1998年、70-71頁）。

そのやさしさだけでもすでに十分人を感動させるものなのに、さらには面倒もいとわず、かならず探し当ててまで、いくつもの通りをこえて私を連れていってくれた。彼らは外国人に対してそのようなことから、本国人にはましてそうであろう。こんなことは一度ではなく、いつもそうだった。一人だけではなく、みんながそうだった。彼らの公德の発達度がよく分かるし、道を尋ねてもわざとこたえなかったかの雲南人とはまさに天と地の差があったというべきだろう」³⁴

だが、大げさなまでの日本礼賛に続いて、筆者はそれでも日本の教育家がいまだに「日本人の公德心は不足している」と訴えていることを紹介し、日本の公德にしても「西洋と比べればはるかに及ばない」との判定を下す。「かの西洋人による公德の美談なるものは、十数冊の本を書いても言い尽くせませんし、もし私が一通り語ってしまえば、私たちのこの『滇話報』は『公德報』になってしまいます」と茶目っ気たっぷりの語調で語るその背景には、「公德」に関して、西洋>日本>中国>雲南という牢固な階層構造があったことがうかがえるのである。経験していないはずの「西洋」について、それを含めた実感を語るという行為のうちに、個々の「経験」を越えて認識や価値観を規定し、序列化をはかる近代の力が働いていることがわかる。それは、地域性を前面に出し（『滇話報』）、実践と身近さを売りにする個人主体の言説（演説・白話）においてもなおいっそう免れないものである。

あるいは、「進化」という基準から日本を語ったものもある。

『滇話報』第1号掲載の夢魔「社会の改良について」は、ダーウィンの進化論を切り口に西洋の全面的なアジア進出について述べたくだりで、雲南の危機に言及し、さらに中国の守旧の民族性を厳しく批判して改良の必要を説いている。そのなかで引き合いに出されるのが日本である。

「たとえば日本国だ。彼らは四十年前までは、何事も我ら中国に学んできた。そしてこの四十年來、彼らは一つ一つのことを西洋に学んでいる。それは、彼らがあらゆることに偏見がなく、改良すべきなら改良すべきとしているからだ。そして今日に至って、西洋人でさえ彼らを見下ろすことができないようになっている」³⁵

また、「迷信」を批判した漱泉「雲南人が鬼神を迷信していることの弊害について」³⁶のなかでは、西洋のキリスト教、日本の仏教もある意味で「迷信」であるとしつつも鬼神に依存するものではなく、雲南の場合はただ鬼神に依存しているから問題であるとの認識が示されている。そこで念頭にあるのは、「迷信」のために危機を招いた義和団の例、そしてイギリスに滅ぼされたイン

34 滇南成仁女士「公德談」同上、27頁。

35 夢魔「社会改良説」『滇話報』第1号、前掲、6頁。

36 漱泉「説滇人迷信鬼神之非」『滇話報』第2号、前掲。

下の例であった。宗教や民間習俗を論じる場合にも、その論理は近代帝国主義によるアジア進出の歴史的経緯と不可分の関係にあり、西洋そして日本を意識したまなごしによって、雲南および中国における「迷信」を指弾するという序列化された構図はここでも顔をみせている。

このように、あらゆる方面で日本への評価が述べられる一方で、日本への批判が皆無だったわけではない。鉄道建設に関連して雲南省が招いた日本人教習が、当初は契約をかわして保証人も立てたが、雲南に来た後にはさまざまな問題が起こった例³⁷や、円と両のいずれの通貨を使うべきかというテーマでは、円の使用は「外国に媚びるもの」との論点もみられた³⁸。そして、何よりも日本は帝国主義列強の一角として、根源的に警戒すべき存在であった。

しかし、遠隔地メディアたる『演話報』の担い手たちは、まさに近代の高みから雲南を「改良」することに使命感を抱くがゆえに、大半の論説において日本への共感を語ってやまなかった。

そんななかで、『演話報』第2号掲載の唯心による「雲南省の演劇改革についての記録」³⁹は、翟海雲による改良演劇を紹介した記事だが、演劇というかたちで遠く昆明に取り入れられた一つの日本の姿を表現していた。記事では、記者によるレポートのかたちで、演劇のもたらす効果とともに昆明の観客の様子が生き生きと描写されているが、そこで演じられ観客の心をとらえたとされる新劇こそは、日露戦争の戦場を題材としたものであった。

「みなさん、朝も早くから廟内がどうしてそんなににぎやかなのかとおっしゃるかもしれませんが、それは新作が舞台にかかるからなのです。みんな遅刻して席がなくなることをおそれて、早くからやってきました。十二時になりますと声が響き渡り、新作の登場です。人はますます増え、城隍廟を倒さんばかり、私は初めからじっくりと観ていきましたが、演じられたのは他でもありません、日露戦争のものでした。形式もよく、精神も優れていました。日本人が国のために一身を忘れ、命を捨てて敵に臨み、戦場にできれば前進のみで退くことなく、死あるのみで生還を求めないあの愛国の心情、そしてロシア人が戦うごとに敗れ、不利だと察するや逃げだす情けないさまをすべて描き出していました。本当に真に迫るもので、活動写真よりもさらに緻密でした。ひとわり演じられるごとに、舞台下の人々は誰もが「いいぞっ」と叫び、一節歌われるたびに、舞台下の誰もが「すばらしい」と叫んだものです。私でさえ、そこではそれが劇であることを忘れ、まるで新聞記者が軍隊に付き添って観戦しているかのようでした」⁴⁰

その後、劇に没頭している記者の背後で、観客同士が日本や日本人について語り始め、さらに

37 磨厲「脩鉄道必先予備人材」『演話報』第5号、1908年9月。

38 太和魂「用圓用兩判」『演話報』第5号、同上。

39 唯心「滇省改良戲曲紀事」『演話報』第2号、前掲。

40 同上、53-54頁。

雲南の置かれた現状についての議論が生まれる。観客の一人から発せられた「われわれ雲南が第二の日本になり、イギリス・フランスを第二のロシアとすることも難しくない」というフレーズは、日露戦争にかかわるミリタリズム≡「軍国主義」が、直接、雲南を日本と重ね合わせようとする視点をもたらした当時の時代相をよく示している。と同時に、記者が演劇のもつインパクトや翟海雲の取り組みを高く評価するなかで、「古い舞台で新しい現象を演じる、優者は勝ち劣者は敗れる」という進化論的世界観がストレートに披瀝されている。これは、清末の中国において、日本を透かしてその先に見える「普遍的な」近代の力を改めて見せつけるものであった。

(3) 『滇話報』のベトナム像

故郷雲南とのコントラストのなかで理想化された日本像と比較して、『滇話報』に描かれるベトナムの姿はどうであったのか。Ⅲ節で、雲南をナショナルなスケールの日本と同一視するケースについて触れたが、ベトナムに対してそうした観点を示したものに、第1号所載の対鏡狂呼客「滇越鉄道についてわが雲南の人々に謹んで告げる」⁴¹がある。作者の対鏡狂呼客は、ベトナムを舞台にした『雲南』雑誌連載の章回小説「死中求活」の著者で、後に雲南講武堂で歴史を教えた夏紹曾（字は伯魯）のことである。ちなみに、夏はベトナム留学の経験者でもあり、『雲南』雑誌に中越国境地帯のレポートを送ったこともある。

この論説は、ベトナム・雲南を結ぶ鉄道である滇越鉄道の自力での建設を説くもので、当時、滇越鉄道はフランス植民地政府による建設が進んで、昆明までの運行は目前に迫っていた（1910年に開通）。夏は滇越鉄道がもたらす植民地化の危機を、インドや小アジア半島の前例のほか、とくに日清戦争後の東三省の鉄道（ロシアによる東清鉄道建設）の経過から説き起こしているが、実はこの論説は危機意識を喚起するだけでなく、雲南人自身による鉄道建設が雲南にもたらす前向きな側面についても訴えているのが特徴である。

文章は鉄道に関連する10の項目について論じているが、そこで重視されているのは雲南と海外とのつながりである。たとえば沿線の鉱物資源については、採鉱の方法を手にするために、他の省から海外留学をして鉱物学を学んだ学生を招請して鉱山技師になってもらい、雲南からもすみやかに学生を外国の学校に送って学ばせるほかない、という現状の厳しさを指摘する。だが、いずれ鉄道と結びついた鉱山がすべて雲南自身のものなれば、50年ほどで雲南はもっとも富んだ地域となり、雲南の鉄道は全地球とつながって、イギリスには及ばなくとも、アメリカくらいにはなる、との楽観的な認識が示されている。

雲南が海外とつながることの重要性については、知識の面でも言及されている。

41 対鏡狂呼客「為滇越鐵路敬告吾滇父老兄弟」『滇話報』第1号、前掲。

「私たち雲南は極辺に位置し、風気は開けず、知識人たちも科挙をのぞいて一步も故郷を出ようとしな。他人が読み終わった新書をようやく読むことができ、他人が読み捨てた新聞をようやく読むことができるというありさまである」⁴²

しかし、自前の鉄道を手に入れば、「都合一日で〔国境の〕河口へ、二日でベトナムのハイフォンへ、ハイフォンから汽船に乗れば三日で香港へ、七日で上海へ、十一日で日本へ至ることができる」という具合に、簡単に海外へ出られるようになることを日数で示し、また、海外に出たいと思わない人であっても、新書・新聞の輸入が容易になり、「五大陸の文明を輸入することができる」という利点を述べている。

世界とつながる雲南の未来像が語られる一方で、危機感を煽る場面では、ベトナムについて次のように言及されている。

「〔我々は〕将来、ひとたび滅びるや、まずはベトナム人の奴隷となり、それからフランス人の牛馬となるだろう。まずベトナム人の乗馬の鎧となり、それからフランス人の囚人となり果てるだろう」⁴³

あくまでレトリックであるとはいえ、「ベトナム人の奴隷になる」という言いまわしはきわめてまれなものであり、この部分はベトナムをよく知る書き手であればこそその表現といえるかもしれない。ところで、清末の雑誌メディアにおけるベトナム観については、「亡国」の参照例とするとならえ方が一般的であり⁴⁴、この論説でも「わが父老兄弟が、かの東三省のような頑固な父老や、かの安南人のような悲惨な奴隷になってほしくない」と主流の言説に沿った訴えがなされている。先に述べたスケールの問題でいえば、ここでは日本におけるのと同じように、ナショナルな単位でのベトナムが雲南と（そして東北の三つの省とも）等置されているということがわかる。もっとも、前者は雲南の優越性を示すため、後者は「亡国」の危機意識を示すためではあったが。

これに対して、『滇話報』第2号に掲載された磨厲「雲南と中国の関係」⁴⁵は異なるスケールでベトナムと雲南の関係をとらえ、雲南をベトナム全体ではなく、ベトナムの一地方になぞらえて描いている。

この論説は危機にあえぐ辺境の雲南を見捨てようとする中国全体への憤りの感情を込めて説き起こされる。

42 同上、26頁。

43 同上、17頁。

44 拙稿「清末雑誌メディアにおけるヴェトナム認識」東京都立大学『人文学報』第341号、2003年3月。

45 磨厲「雲南與中国の關係」『滇話報』第2号、前掲。

「我らが中国のなかでものを知らないつまらぬ人間は、口を開けば雲南は辺省で、その場所はきわめて貧しく、〔他国との〕もめごとがやたらに多い、こんな雲南を所有していることは政府にとってはかえって面倒なことで、フランス人に併呑されてしまってもかまいやしないし、イギリス人に割譲されてもどうだっていい、という」⁴⁶

作者は「中国と雲南は無関係だとみなす」態度を厳しく批判し、中国はあくまで「二十一行省」としての中国であり、誰もが「大漢の民族」・「黄帝の子孫」であって、切り離すことは不可能だと主張する。そこでは雲南を中国の一体性のなかにつなぎとめるために、民族主義的感情を刺激することばがあえて使用されている。「中国四億人の同胞」とは、「辺境の省であれ、中心の省であり、大きな省であれ、小さな省であれ、男であれ、女であれ」、すべて中国の同胞であるというとき、かえって雲南を含めたあらゆる個性や差異が損なわれることになる。そこで、雲南の個性を示しておくために、作者は「地勢」と「侵略政策」の2つの点を強調する。とくに前者について「中国の地勢からみれば、雲南・広西は南辺の門戸にほかならない」として、次のように語る。

「私はここであの誰もが知っているベトナム国を例にとってみたい。ベトナム国がまだ滅びていなかったときは中国と同じだった。中国は二十一省あるが、ベトナム国は三十省ある。ベトナム国はサイゴンを門戸としており、ちょうど中国が雲南を門戸としているようなものだ。ベトナム国はゲアン・ハティン・バクニン・タイグエンを廊下や階にしているが、ちょうど中国が四川や貴州などの省を廊下や階にしているようなものだ。ベトナム国はタインホア・フアン・ザーディン・ナムディン各省を奥座敷にしているが、それは中国が両江・両湖・各行省を奥座敷にしているようなものだ。フランス人がサイゴンの植民地経営に乗り出そうとしたとき、彼ら良心をなくした亡国政府はフランス人の利益をそこなうことをおそれ、さらにはサイゴンをたいした場所ではないとみなしたために、直ちにフランス人に占領されてしまったのだ。まだ二十余省があり国も成り立つからと、各省の人民はまたもこぞって利己主義におちいり、フランス人が自分のところを侵略しにさえこなければ、サイゴンなど滅びようが滅ぶまいが知ったことかというありさまだった。こうしてフランス人はかるがるとサイゴンを取り、サイゴンを取った後数年も経ずして、ゲアン・ハティン・バクニン・タイグエンも滅んでしまった。ゲアン・ハティン・バクニン・タイグエンが滅んだ後、数年を経ずして、タインホア・フアン・ザーディン・ナムディンの各省も滅んだ。タインホア・フアン・ザーディン・ナムディンの各省が滅ぶにいたって、ベトナム国は全滅してしまったのだ」⁴⁷

46 同上、6頁。

47 同上、8-9頁。

ここでは、雲南をベトナム南部のサイゴンになぞらえることで、雲南の占める位置の独自性、重要性を主張する戦略に出たわけである。作者は、現在の雲南が英仏両国に対抗できない理由として、教育・軍事・実業の未発達とともに滇越鉄道が未回収であることを挙げ、全国各省による支援を訴える。その文脈においては、独立した存在として日本と並び立つ雲南ではなく、ベトナムの一部として「亡国」のきっかけとなる姿を提示する必要がある。しかし、そのままでは、雲南そして中国の湧き上がるナショナリズムを満足させることはできない。そこで、文章は「侵略政策」の対象であった自らの立ち位置を急カーブさせながら、次のように結論づける。

「各国が中国をいじめ、中国を軽視し、中国を机上の肉や釜の中の魚とする悲しい眺めを一変させ、中国に屈服し、中国を尊敬し、中国の保護を求め、中国の藩属となりたがるという喜ぶべき状態にもっていくことこそ、我々の願いではないか」⁴⁸

不断の改革、あらゆる場面での「維新」、すべての人の進歩追求によって、十数年後にはいまの日本にも負けないという希望を語り、最後に雲南と中国の一体性を訴えて文章は終わっている。

おわりに

本稿では、雲南同郷会と『演話報』について取り上げてきた。

雲南同郷会については、それが留学生たちにとって厳格なルールの順守にもとづく民主主義の訓練の場であったことを指摘した。そして、『演話報』については、民主主義の訓練の場から「演説」という形式で発せられた女子の声が増幅されて日本礼賛へと結びついたこと、日本の存在は西洋近代の力の序列の中で参照されたこと、さらに雲南の自己認識が日本・ベトナムとそれぞれ参照しあうなかで形づくられていった様子を論じた。そのさまざまなバリエーションのなかで、雲南が理想化された日本になぞらえられることはあったが、日本の一地方に比定された事例はひとまず見当たらなかった。このことは、清末当時において帝国主義と植民地のはざまにあった雲南の自己認識の変遷を考える上で、示唆的である。

『演話報』第5号には、侠抱による「自尊自大こそが独立精神である」⁴⁹という論説が掲載されている。その趣旨は、しばしば批判的となる「自尊自大」という態度は決して悪いものではなく、むしろ自信を喪失することの方が恐ろしい、というもので、まず英・米・独・仏・日・露の諸列強が現に世界で覇を競っている事実を指摘する。そのうえで、「他のことでは詳しく論ずるのは難しいが、雲南にほど近い二つの場所についてだけは、とりあげて一つの証拠としたい」とし

48 同上、14頁。

49 侠抱「自尊自大便是独立的精神」『演話報』第5号、前掲。

て、西のミャンマーと南のベトナムの存在に言及している。イギリスのもとで言語すら失おうとし、逆にイギリス人を崇拜すらしているとミャンマーのことを紹介した後、ベトナムについては次のように語る。

「この三十年間、彼らは他に方法もなく、しばしば密かに悲観して語っている。『我々安南にいまや希望はなくなった。ただ、中国が、あるいは中国のどこかの一省が、中興して私たちを苦しい境遇から解き放ってくれることを願っている。そうすれば私たちはこの苦海から逃れることができるが、さもないと永遠にお日様を拝むことができなくなる』、と」⁵⁰（下線部は筆者による）

作者の結論は、「自尊自大」の精神が強大さをもたらし、「自卑自小」の精神が滅亡をもたらすのであり、原因と結果を取り違えてはならない、というものだった。「[中国が] 国家を回復するためには、まず自尊自大を回復しなければならない」という多分に精神主義的な語り口のなかには、当時の中国が置かれていた厳しい国際環境があったことは疑いをいれない。と同時に、そこには帝国主義全盛時代のルールにしたがって列強と覇を競い、かつての「藩属」を取り戻したいという雲南発の近代の欲望があらわになっている。

50 同上、6頁。

